

Judith M. Brown,

*Nehru : A Political Life.*New Haven and London : Yale University  
Press, 2003, xvi + 407pp.よしだ おさむ  
吉田 修

## はじめに

不思議な伝記である。インドの初代首相、ジャワハルラル・ネルーの生涯を追いながら、独立運動期から独立後の国民国家形成期までのインド現代史が、その特徴が、そして何よりもその複雑さが、これまでになくくっきりと浮かび上がる。モハンダス・カラムチャンド・ガンディーの活動ですら、新たな光が与えられたかのように思われる。著者はインド近現代史を描くためにネルーを語った、こういうべきなのであろう。

## I

著者のオックスフォード大学教授、ジュディス・M・ブラウンは、ガンディーの伝記 [Brown 1989] をもすでに著している、インド近現代政治史家である。彼女は、本書の目的を3つ挙げている。ひとつは近代インドの形成に中心的な役割を果たした人物の生涯を語り、そのダイナミクスや目的、成果、限界を検証すること、2つめは、その生涯を、急速に変化しつつあったインドの政治環境を覗く「窓」となるように描くこと、そして最後に、ネルーの抱えたジレンマを、アジア・アフリカの同世代が共有したジレンマとして描くことである。

これらの目的は、実質的にはただひとつの目的を果たすために構成されている。すなわち、著者は非西洋社会の近代化、なかでも政治社会の近代化を、「西洋化」とは捉えず、むしろ西洋が植民地支配を通じて非西洋社会にもたらす経済や技術など、政治

制度や政治過程以外の、いわば普遍的「近代」との相互作用のなかで、非西洋政治社会そのものが変容して生み出す独自の政治的「近代」の特徴を明らかにしようとした。

このような非西洋の政治的「近代」は、したがって西洋の政治的「近代」が非西洋の伝統社会を変容させて生まれるのではない。植民地権力は、西洋の出先ではあるが、西洋の政治的「近代」が生み出した人権や平等などといった普遍的価値を、植民地の住民にもたらそうとはしない。「普遍性」に基づいた政治的「近代」を植民地にもたらそうとするのは、上述の非政治的「近代」の流入の結果、非西洋社会そのものの内部に成長した西洋化エリートであり、彼らの西洋化された価値観とそれに基づく社会変革の試み——そのダイナミクスや目的、成果、限界——が、非西洋の土着社会と衝突し——アジア・アフリカの同世代が共有したジレンマ——、その相互作用のなかで、非西洋社会の政治的「近代」は形成される。これが本書を通じて著者が提示することがらであり、それゆえ、非西洋社会内部の西洋化エリートこそ、政治学という政治的「近代」の観点から非西洋社会の政治的「近代」を評価する基準——あるいは、われわれがその社会を覗く「窓」——となるのである。

この観点は、インド近代史の、そして非西洋近代史全般の、各アクターの役割を変えてしまう。植民地権力が非西洋社会の政治的近代化の推進者でなくなるのは当然であるが、たとえばガンディーの場合は、土着性よりもいっそう普遍性のほうに役割評価の重心が移るであろう。それに代わって土着政治社会を体現するのは、インド国民会議（派）内のさまざまな地方的利害を代表する指導者たちや、彼らが構成する州政府である。彼らこそが、西洋化エリートを代表するネルーの、西洋的に体系化された政治的近代化の企てをサボタージュし、インドの政治的「近代」を非西洋化・土着化した主要なアクターの、重要な一角を占める人々である。しかし、彼らの行動の背後には彼ら自身の利害が、さらには、その時々々の制度の下で彼ら自身の利害を代表する「多数者」がいた。

こうした非西洋近代の政治的独自性の特徴は、これまで政治学が近代の普遍的特徴とみなしてきた諸要素と比較しなければ、明らかにすることはできない。諸要素には、制度としての民主主義などの外形的なもの、人権や平等などそれを機能させる前提としての価値的なものがあるが、比較が外形的なものにとどまっていたのでは相違の本質を捉えることができないであろう。独立インドの民主主義をウエストミンスター型と呼び、繰り返される選挙だけを追っていたのでは、十分ではないということだ。そうではなく、価値における普遍性も含めた政治的「近代」をインドにもたらそうとする企てを通じてインド政治の展開をみることによって初めて、インドにおける非西洋近代の政治的特徴は明らかになる。そして、この企てを行おうとした人物こそが、非西洋の政治的「近代」の特徴を明らかにし、西洋近代の歴史的経験によって制約されない政治学を樹立しようとする者にとっての「窓」となるのである。

## II

もちろん、誰でも「窓」の役割を果たしうるわけではなく、インド政治に深く関わりつつ、他方でそれに一定の距離をもつ人物のみがそれを果たすことができる。それには、ネルーほど適当な人物はいない。

当時の会議派の有力者が、各地域に地盤をもつ名望家ゆえにそうであったのに比べ、ネルーが有力になった事情は大きく異なっている。ネルー家自体が、出身地であるカシミールからアラハバードに移り、そこで父モティラルはイギリス植民地支配が生んだ法律家という職業で収入を得ていた。したがってネルー家は、地域に根をもたず、地方政治から超越した存在であった。

そのなかでジャワハルラルは、「インド」への深い愛着を自身の内に育みながらも、長期にわたってイギリスで教育を受け、帰国後もしばしば長期間ヨーロッパに出かけた。経済的にも初期には弁護士として破格の高収入を得ていた父に依存し、後には自身の著作の印税収入によって賄いえており、生活の

心配なく政治活動に没頭することができた。この点も、権力への接近が経済的必要性に結びついていた他の会議派政治家とは異なっている。

しかし、ネルーをインド近代政治考察の「窓」としたものは、彼とインド社会との間の「距離」だけではない。彼は、イギリスでの生活やその後の幅広い読書、そして彼自身の政治活動等を通じて「インドの（再）発見」をし、そこから彼が考える「あるべき近代国民国家インド」を作り上げた。それは、最下層の人々に届く社会改革を通じて形成された国民を前提とした、非宗教的＝世俗的な独立国家であり、西洋近代の国民国家とほぼ同義であった。それゆえ、ネルーの闘いは、西洋近代政治学とインド近代史との闘いであるといってもよいのであって、会議派のなかで「宗教的」に振舞うガンディーと権力になびく有力者との間で自身の理念になかなか手が届かないネルーの苦悩は、近代政治学の眼でインド近代をみる読者に、その可能性と限界とを教えてくれることになるのである。

## III

本書は全体が5部16章からなっている。その構成は以下のとおりである。

### 第1部 帝国の選ばれし者、1889～1920年

#### 第1章 インドとイギリス支配——機会と挑戦——

#### 第2章 若きネルー——特権と将来——

#### 第3章 転機

### 第2部 大衆ナショナリズムの曖昧さ、1920～1939年

#### 第4章 政治家の誕生

#### 第5章 急進志向、1926～31年

#### 第6章 インドはどこへ

#### 第7章 孤立

### 第3部 帝国終焉の悲劇、1939～1948年

#### 第8章 戦争の体験、1939～1945年

#### 第9章 独立の体験、1945～1948年

### 第4部 ネーションの創設、1948～1956年

#### 第10章 ネーションの想像

- 第11章 ネーションの構成
- 第12章 ネーションの創出
- 第13章 国際社会におけるアイデンティティの創出
- 第5部 未来像の挫折, 1957~1964年
- 第14章 民主的リーダーシップの現実
- 第15章 新たなインド?
- 第16章 権威の浸食

第1部のいう「帝国の選ばれし者」(An Imperial Heritage)とは、ネルー自身のことである。1857年のインドの反乱は、雇われインド人の忠誠心に依存するイギリスのインド統治の脆さを見せ付け、イギリスをして、インド世論にもっと敏感である必要を認識させた。それゆえ、東インド会社を廃して直接統治に移ったイギリスは、藩王や貴族、大地主など、地域社会の伝統的な、しかし没落しつつあった支配層を保護・育成して協力者(コラボレーター)とし、植民地支配は彼らとの同盟に依拠することとした。しかし、これら「新ジェントリ」層の育成は、彼らとその小作人との関係の悪化がイギリス支配そのものに跳ね返ってくることによって深刻な困難に直面する。そこでイギリスは、英語教育を受けた新しい名望家層を新たな協力者として求めるようになる。これがまさに1889年生のネルーの生きた時代であり、ネルー一家の人々はこうした層の代表例となるものであった。

アラハバード高等裁判所の民事弁護士として大きな成功を取めた父モティラルは、英語教育を受けた専門家インド人に対してイギリスが開いた機会を最初に掴んだ一人である。彼が属するカシミール・バラモンに特有のヒンドゥーとムスリムの文化的融合とともに、その特権的に豊かで西洋化された生活は、彼らの外にあるインド社会に対する複雑な優越感を、ネルー父子の内に植え付けた。彼らにとってモンタギュー・チェルムスフォード改革が容認できなかった大きな理由は、そこにインドのネーションを正当に代表させようという考えがまったくみられなかったからであるが、それは、著者の考えでは、宗教別代表制に加えて、地方名望家層が過剰代表に、都市

部の教養層が過剰代表になっている選挙制度のなかであらわれていた。つまり、インドのなかでも地方の伝統的支配層はインドを構成する個別利害を代表するに過ぎず、その意味ではむしろイギリスの植民地支配によって他の個別利害による侵食から「守られている」、それに対してネルー父子ら教養層こそがネーションとしてのインドを代表しうるのである。

このように、イギリス支配の下で生まれた新たな機会を掴んだネルー家のような新興名望家層こそが、イギリスに対してネーションとしてのインドを代表できるという逆説に、著者のネルー論の基盤がある。しかし、伝統的なインド社会に距離を置き、複雑な優越感をもってそれを眺めていたネルー父子は、インド社会との接点の希薄さのゆえに彼らが思いえがくインドのネーションを実現する方策をもっていない。それゆえ、この逆説は、彼らのビジョンを現実に転化する力に出会わないかぎり、歴史的な意味をもちえない。ここで著者は、彼女のネルー論にガンディーを導き入れる。

南アフリカを訪れたガンディーの位置は、アラハバードにおけるモティラルのそれに近いものであった。植民地社会のなかで平等な権利を認められていないインド人コミュニティにとって、教養と英語力をもつ彼は、入植者政府との交渉ができるという意味で特別の存在であり、このことによって彼は、出身地も言語も宗教もさまざまな人々からなる南アフリカのインド人社会を代表することになった。

しかし、「代表」が理念のレベルにとどまっていたネルー父子らインドの新名望家層とは異なり、現実に現地のインド人社会を代表し、南アフリカのインド人が大英帝国の市民ないし臣民としての権利を享受すべきだと確信したガンディーは、大きな内的変容を遂げる。彼は、平等を求める闘いを、「真理の探究」という、あらゆる宗教を超えた信仰のレベルで理解した。すなわち、あらゆる物事のある真理を求め続けることこそが真の信仰であると考え、そのような信仰者は生活のどのような分野も避けることはできないとして、南アフリカ政府との戦いを通じて政治に深く関わっていく。真理を探究し続ける者の闘いは、敵に対して暴力を振るうのでは

なく、自らを変革し、真理をしっかりと掴んで規律ある生活のもつ力強さを用い、非暴力的に行われなければならない。こうして彼は「非暴力」にたどりついたが、それは、西洋の物質文明を捨ててインド文明の諸価値を回復することとインド人自身の諸関係の性質とにあらわれるべき道徳革命の必要性を認識することであり、真実を掴み規律ある生活から力を得る。すなわち、ガンディーは英語による教養で身を立てた者が自らをその地位につけた手段を放棄し、植民地支配に対置される「インド」的なるものを率先して実践することによって、インド大衆を自治のための運動に動員しようとしたのである。

## IV

ガンディーは、反ローラット法運動で市民的不服従を呼びかけ、次いでアムリトサル虐殺を非難し、また第1次大戦後のトルコのスルタンの地位をめぐるキラファト運動に関連して、非暴力的非協力の運動を始めた。これにジャワハルラルは直ちに感化され、モティラルものちに全面的に受け入れるようになる。それは、イギリスのインド支配がインド人の協力に依拠しているかぎり、非暴力的非協力の方法がその支配の安定性を破壊する力をもっていたからであるが、それにとどまらず、この方法は、ネルーら新名望家層が実行することによって、もっとも効果を発揮することができたからでもある。なぜなら、イギリスが選挙制度などで重視しようとしている伝統的・土地名望家層は、すでに小作人等と対立関係にあり、むしろその対立が予先をイギリス支配に向けかねない情勢で、現実的には新名望家層を育成して彼らの忠誠に依存しなければ、イギリスによる安定的なインド支配は永続化できないと考えられたからである。

たとえば、インドにおける独立運動から独立後の民主的政治発展へのスムーズな移行について、われわれは会議派が全国にもっていた組織的基盤の貢献をアプリアリに前提してしまいがちであるが、著者は、最下層の人々に届く社会変革を実現しようとしながら、それをかなえることのできないネルーの姿

を通して、会議派の地方組織が、実は草の根に至るような組織も支持も築けていなかったことを明らかにする。また、中央政府首相ネルーと州首相等地方指導者たちとの関係についても、教え諭すネルーと教えられる州指導者というように、一方向的に捉えてしまいやすいものであるが、これもまた、理念を語るネルーと、地元の利害に従って行動しようとする州ボストの間での、説得とサボタージュの関係であることが示される。

こうしたことが明らかになるのは、本書がその生涯を描くネルーという人物が占めた、インド近代史におけるきわめて特殊な位置のゆえである。言い換えれば、「土着政治」のしがらみから自由であったネルーは、イギリスによるインドの政治支配を拒否しながらも、「その後」については、西洋文明が発展させてきた政治制度、国民国家を理想としてもち、独立運動と独立国家の中心にいて、その理想をインドに実現することに自分の生涯を捧げた。それゆえ、彼自身が遭遇したさまざまな困難や障害のなかに、西洋近代と対比したインド近代社会の特徴があぶり出されてくるのである。

この点の意義は、著者が「宗教的」と評するマハトマ・ガンディーの場合と対比——むしろ「補完」というべきかも知れない——することで、いっそう明確になる。同様にイギリスで教育を受けながら、そのことによって、ネルーは距離を置いてインドをみるという立場を確立したのに対し、ガンディーは西洋文明の拒否とインドの過去への回帰とを通じてインドの大衆を動かした。独立運動に大衆の基盤を与えたこのガンディーの方法が、近代的な国民国家を形成しようとするインドにとってどういう意味があったのか、その政治学的意義を測ることは、しかしながら容易ではない。なんにせよガンディーによってでなければ独立運動は大衆を動かせず、大衆が動かなければ独立もなく、国民国家形成という課題も現実化しない。ネルーはガンディーの方法にいくらか批判的でも、ガンディー抜きでは果たされぬ課題の先に自身の理想があるために、自身の西洋近代的世俗主義とガンディーの宗教色を帯びた大衆行動との間の矛盾に実践的に苦しみながら、結局はガンデ

イーを受け入れた。それゆえ、そうしたネルーの政治的実践そのものが、ガンディーの指導による独立運動の、西洋政治学の用語を用いた批判と解釈になっている、著者はこう考えているのである。

このように、本書の真骨頂は、民衆の自発的変革を通じてインド国民国家を形成しようという西洋的理念をもちつつ、それを実現する手段を自分の周囲には見出せなかったネルーのガンディーとの遭遇、批判、そして「帰依」の叙述にある。それゆえ、ガンディーというインドの現実と西洋的理念との媒介者を失った、インド独立後のネルーについての議論

は、どうしても平板にならざるを得なくなった。あるいは、その平板さのなかにこそ、師を亡くし、孤高の度合いを高めていく政治家ネルーの悲哀が込められている、著者はそういいたいのかも知れない。

#### 文献リスト

Brown, Judith M. 1989. *Gandhi : Prisoner of Hope*. New Haven and London : Yale University Press.

(広島大学大学院社会科学研究所教授)